日水研年報，(5)：29-37，1959.
Ann. Rept. Jap. Sea Reg. Fish., Res. Lab., (5)：29-37, 1959

丹後伊根浦の冬ブリ漁況の長期変動について

伊　東　祐　方

On the Long Term Fluctuations of Catch of Buri, *Seriola quinqueradiata* in Winter at Ine, Tango District

BY

SUKEKATA ITO

Abstract

Ine facing to the Wakasa Bay is well-known as a pioneer district of the set gill-net fishery and the social cooperative system is adopted by the establishment of Kabu (a stock sharing system).

Then, the history of the district were well studied from the view-point of history and economics by many researchers.

Among thier many papers, the data of catch of Buri in winter were reported here and there. And fortunatly also, the gears, net-numbers and fishing grounds have not changed little for a long time.

The present paper deals with the long term fluctuations of Buri catch studied by thier data.

The period of rich and poor catch can be generalized as follows.

……1625	Period of rich catch
1630……1660	〃 poor 〃
1675……1685	rich
1690……1765	poor
around 1715	slightly rich
〃 1730	〃 〃
1770……1782	rich
1783……1854	poor
around 1810	slightly rich
〃 1830	〃 〃
1855……1920	rich
1921……1945	poor
1946……	rich

It seems that the catch of Buri changes with long and short term fluctuations during the historically long time, and that long time changes are neither directly due to the availability of fish nor to the hydrographical conditions, but to the abundance of the

fish population.

We can get hardly any conclusion as regards the definite periodicity of the fluctuations of the fish catch but might be allowed to suppose that the long and short periodic changes, the cycles of which are about 90 and 10 years' respectively, exsist in the catch of Buri.

I. はしがき

一般に生物集団は量的にも，地理的分布においても長期あるいは短期の変動を繰返して脈動しているとみることができる．

魚類の長期変動についてはPETTERSSON (1926), JAHANSEN (1926, 1927)，宇田 (1952, 1957, 1958)，木村(1949)，横田(1953)，伊東(1956)などが，また，短期変動については佐藤・田中 (1949)，田名(1948)，横田 (1953)，久保 (1957)，永田 (1957)，伊東 (1958) などの報告がある．

筆者はそれらの変動に関心をもち数年来資料を集めているが，今度伊根浦のブリ漁業に関する諸資料をみる機会をえた．

伊根浦（現在京都府与謝郡伊根町の一部）は若狭湾北西部にある伊根湾に面する亀島，平田，日出の3部落の総称で，古代から漁業の隆盛な地としてしられ，とくにブリ網（建刺網）の我が国における発祥地として，また古くから株制の制定せられた漁村として有名である．

それで，漁業史，経済史的観点から，羽原 (1953)，岩崎 (1954, 1955a, 1955b)，「京都府漁業誌」(1909) などによつて詳細に報告されている．これらは歴史，経済史的の面から研究されているが，水族の豊凶を示す記録が散見される．

ここではそれら報告及び山口 (1957) などによつて，伊根浦の冬ブリの豊凶について報告したい．

しかし，筆者は社会，経済史方面の知識に疎いため，記録の信頼性，また背後にある社会経済的関係などについて充分認識しえない点が多々ある．したがつて検討に際し過誤をおかす恐れがあるので，その点了承願うとともに諸賢各位の叱正をお願する次第である．

II. 資　　料

まず，伊根浦のブリ漁業の歴史について簡単にふれておきたい．

ブリ網漁業は亀島で明応年間 (1492～1500)，平田で天正年間 (1573～1591)，日出で慶長年間 (1596～1614) に始められたといわれる．

伊根浦ブリが成生産ブリとともに天下の「札物」として扱われ，看運上の他ブリ運上の責を負わされたのも慶長時代といわれ，また伊根ブリの名声を独占するに至つたのは寛文7年 (1667) 以後ともいわれる．

そして，株制は亀島，平田においては慶長以前に制定されていた模様であるが，三部落の持株が124株，即ち亀島75，平田37，日出12株が定まつたのは慶長～寛文時代 (1596～1672) といわれ，その株数は大正9年 (1920) に138株と増加されるまで約300年間続いた．

また，漁場は元禄～享保時代(1688～1743)に内湾不漁のため，外海に一部移つたほかは明治末期頃まであまり大きな移動は行なわれていない．

伊根浦の1株は刺網2ケ統からなり，1ケ統は2把とされ，漁期は11月1日～翌年2月15日までと限られていた．漁具一把は麻糸の網目7寸4分の横291掛，縦38掛からなり，仕立上りそれぞれ22尋で，それを2把連結して1ケ統として用いていた模様である．

こうしてみると，伊根における漁具，その統数及び漁場は明治末期に至るまで大きな変化がなかつたとみてよい．

また，幕府運上は寛文6年 (1666) の記録では1055本であるが，その後貞享2年 (1685) 幕府の政策による他村へのブリ網許可方針に関連して1300本となつた．しかし，その数は明治4年 (1871) の廃藩置県まで続いたことも特徴的である．

それで，前記諸資料から冬ブリの豊凶を検討するのに目安となる記録を附表に示した．

もつとも古い資料としては田井，成生で元和8年(1622)前後ブリ豊漁との記載である．寛永18年（1641）前後の約30年間は漁場紛争が続いていて，内湾ブリが不漁であつたことを推察せしめる．

その後，寛文12年（1672）以降漁場紛争も俄かに静まつた模様であり，また前述の運上の増加を認めたこと，伊根ブリの名声を独占したとする年代に当つているから，この時代は比較的好漁時代と推定される．

元禄3年（1690）の文書，元禄以後若狭湾一帯不漁との記録，田井村の漁獲量，運上軽減申請の文書などから，元禄以後長期の不況に落入つたことがうかがわれる．

しかし，宝永7年（1710）～享保5年（1721）の約10年の間資料をかくが，この間一時的好漁があつたために資料がないのか，本当に資料がないのか明らかでない，また，享保9年（1724）～天文4年（1739）の約15ケ年の資料をかくが，その間享保12年（1727），溝尻・伊根ブリ大漁との記録が「京都府漁業史」にみられ，また，享保13年（1728），越中・能州ブリ好漁と推定される資料があるから，この間一時的な好漁時代とみてよいようである．

宝歴時代（1751～1763）には諸資料にみられるように大不漁に見舞われたものと考えて間違ない．その不況はさらに続き，明和6年（1769）に至つて久し振りの大漁が訪れた．

大漁は安永元年（1772），天明2年（1782）と続いているが，天明の大漁は10年振りとあるから．それ以前は大漁とはいえまい．

天明の大漁の翌年からは大飢饉と不漁に見舞われ，その状態が文化10年（1813）頃まで続いた．

その後一時的に好漁を示したものの，またまた，文政～天保（1818～1843）には不漁に落入つたと推定される．

安政2年（1855）には大漁で，宮津事跡記に「伊根浦に鰤漁稀之夥敷大漁，其他諸漁は殊之外不漁……」とあるが，漁獲は7000本であり，これを上述の記録に残す程であるからいかに大漁が久しかつたかうかがい知ることができる．その後は比較的順調の漁を示し，安政6年（1859），文久2年（1862）には，それぞれ14,000本，10,000本の大漁であつた．

文久3年～慶応2年（1863～1866）にはたいした漁もなく経過した．慶応3年（1867）15,000本の大漁があつたが，その後明治3年（1870）までは大漁とはいいがたい．

その後明治14年（1881）までは毎年大漁を示している。

慶応3年の15,000本の漁獲に対して藩庁報告には4,400本と減じて報告しており，いかに「カクシブリ」の多かつたかを示すもので統計を扱う場合注意を要しよう．

その後は記録に示されているように，一時的不漁に入つたが，明治23，24年（1890～1891）には大漁を示したが，明治28年（1895）には不漁に入つた．

明治24年（1891）の水産調査予察報告によれば「……富山湾内に入れば……台網鱗接櫛比す……」とあり，富山湾の台網がいかに隆盛であつたかを物語る．しかし，その後は衰退をみせたらしい．

伊根浦では明治29年（1896），明治33～35年（1900～1902）には大漁を示した．

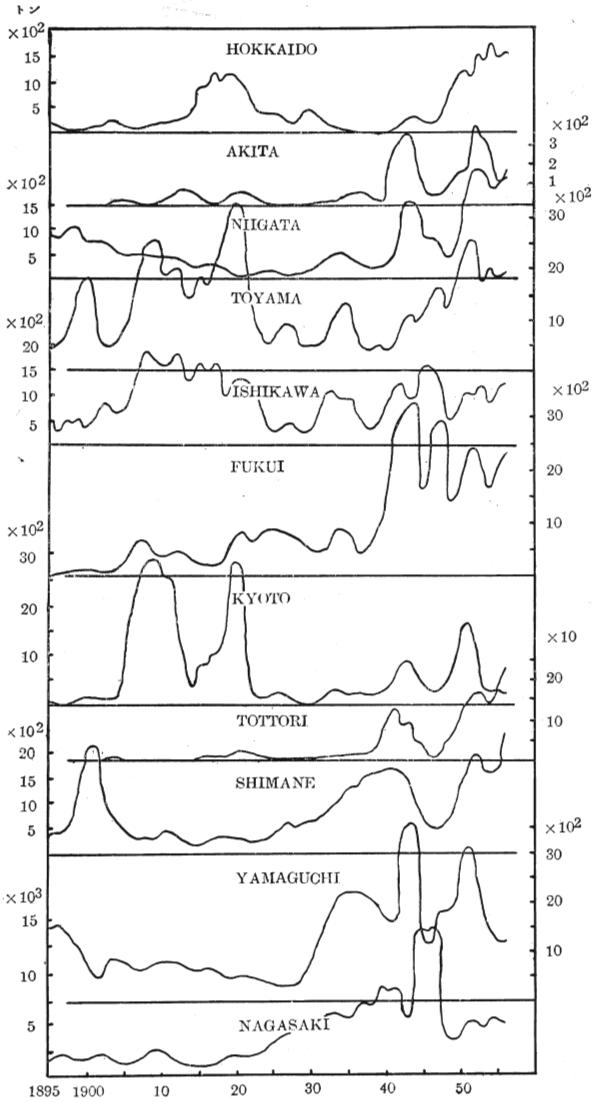
明治25年（1892），日高氏考案の大敷網が年々全国に拡がり，長い伝統のもとに刺網に専念してきた伊根浦漁民にも大きな影響を与え，明治38年（1905）ついに大敷網一ケ統を土佐の漁民との協同経営の形でとりいれ，翌年からは2ケ統施設し，従来刺網では夢にもつかぬ大漁を記録した．

その大敷網の漁獲は大正9年（1920）まで好漁を示したが，その後，昭和2年（1927）に大漁をしたほかは年々減少の一途を辿り不漁にあえぐ結果となつた．その後，昭和17年（1942），若狭湾一帯で数十年みざる大漁があつたとの記録がある．

一方，伊根伝来のブリ網はついに，大正2年（1913）をもつて長い伝統の幕をとじる結果となつた．

つぎに，近年の漁況については県別漁獲統計によつて検討してみたい．（第1図）

京都府の場合，前述のように明治39年（1905）までは刺網が主体で漁獲も少ないが，その後大敷網の導入で急激に上昇し，明治42年（1909）前後と大正9年（1920）前後に大きなピークをもつて大きく増減しているが，大正11年（1922）頃からは不漁を続け，昭和8年（1933）前後一時的に好漁をみたが不漁に経過している．そして昭和17年（1942）前後に大漁，それから再び減少しているが，昭和24年（1949）前後から再び



第 1 図　日本海域における府県別ブリ漁獲量の経年変化（3ケ年移動平均）

上昇傾向にあるが，昭和29年（1954）頃から不漁をみせている．

この前半期の変動傾向は既述の伊根浦定置網の漁況とよく一致している．このことは，漁況記録のない伊根浦の近年の漁況も一応県単位の統計資料から推測してもよいようである．

つぎに，他県の漁況をみると，富山，石川両県の漁況は京都府の変動傾向と比較的似ている．ただ，隣接の福井県の漁況と似ていないことは意外に思えるが，福井の場合，漁獲主体を夏ブリに求めており，京都，石川，富山諸県は主体を冬ブリに置いていること及び漁具数の経年的変化に主因があるようである．しかし冬ブリを主体とする新潟県の場合，前記諸県と統計年前半期において変動傾向が全く異なるのは不明である．ただ，この統計年代には漁具の変遷すなわち台網→大敷網→上野式大敷網→落網と移り変りがはげしいだけに社会経済的要因が強く影響したり，また佐渡を主体とするだけに海況の影響などが強く働いているかもしれない．

夏ブリを対象とする秋田，福井，鳥取などが比較的似た変動を示し，また西部海域では異つた変動を示していることは注目される．

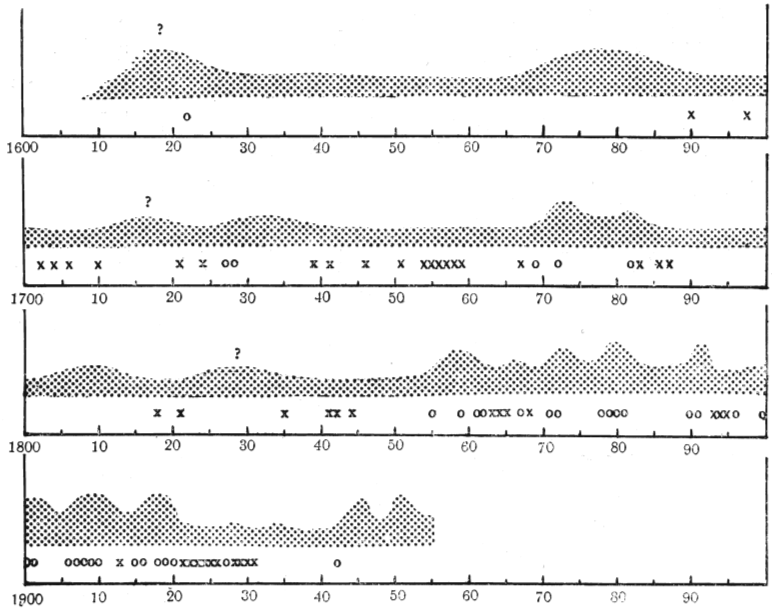
Ⅲ．考　　察

伊根浦では漁撈技術及び政治的影響の面で多少の変化があつたにしろ，過去数百年に亘つて漁具，漁具統数，漁場などが社会共同体制のもとにほぼ一定に保たれてきた．したがつて記録に示された漁況をそのまま時代的な豊凶を判断するのに用いても大きな誤はないだろう．また，近年だけの資料という欠点はあるが，伊根浦のブリ豊凶が京都府のそれに似ており，さらにまた，京都の漁況変動傾向が石川・富山両県のそれと比較的似ていることから，伊根浦の豊凶の記録の不充分さをそれら諸県の記録から類推することができるようである．これらのことは長期変動をみる場合極めて好都合といわねばならない．

それで，附表から豊凶を判断して記入し，さらにそれらから豊凶の変動を模式的に示したのが第2図である．ただ，記録が時代によつて精粗があるので，いわゆる短期変動は無視されたり，見落されすること，また豊凶の判断に主観が多少入ることは資料の性質上やむをえないであろう．

ともあれ，伊根浦ブリ漁況に長期的変動があつたことだけは充分推察できよう．

古い時代については資料が不充分で信頼はおけないが，1650〜60年を中心とした不況時代，1680年を中心



第 2 図　丹後伊根浦における冬ブリの漁獲変動の模式図

○　豊　漁
×　凶　漁　を示す

とした好漁時代があつたと推測される.

そして，1690～1767年にかけて長期の不況が訪れたことは間違ない．しかし，その間一時的に1711～20年が比較的好漁？，1720～1737年前後に好漁があつた模様である．その間最も不漁の時代としては1750～1760年が考えられる.

その後1769～1782年は好漁（その間一時的に不漁があつた模様），1783～1854年は不漁時代といえよう．その間1800～1810年，1825～1830年に好漁があつたと判断してよいような資料がある．1840年を中心として大きな不漁が訪れた.

1855～1920年代は好漁とみられるが，その間数年を単位とする豊凶を伴つて脈動していたと考えるのが妥当である.

その後1921～1941年にかけて不況時代を招き，その後は比較的好漁時代に入つたとみることができよう．しかし，10年前後を単位とする豊凶の脈動はあるようである.

一般的にみて，1700年代，1800年代前半は長期の不況が見舞つていたとみてもよかろう.

つぎに，凶から豊えの転換期を推測すると，1670年前後，1765年前後，1855年前後，それから近年を豊漁時代とみれば1940年前後となり，その間約90年前後の周期があるようにも推察できる.

なお，そのほかに，20～30年，さらに1850年以前にみられるように，10年前後を単位とする小変動があるようである.

とにかく，伊根冬ブリの豊凶に周期性があるとはいいきれないが，長期，短期の変動を伴つた脈動をしていることだけは間違いない事実であろう.

漁獲の豊凶の変動要因として，(1) 社会経済的要因，(2) 魚群の利用度を規制する海況要因，(3) 資源的要因　の３つに大別できるが，実際にはこれらの要因は交絡しているのが普通であり，正確に判別することは困難である.

今回の場合，しいて考えるならば，前述したように，漁具，統数，漁場，運上などがほぼ一定していたこ

とから，社会経済的要因はあまり大きいものではないだろう．

また，海況要因の場合，魚群の漁場えの接岸・離岸を生ぜしめる海況条件と，魚群の分布を規制する条件とが考えられるが，前者は短期的変動にはある程度大きく影響があるにしても長期変動には直接的には関係はなかろう．また，後者の場合は対象魚種の分布領域の北限あるいは南限に当る末端海域においては長期的変動に大きくえいきようすることはあるが，その場合も資源の増減に関連しているとみられる．したがつて，今回のブリについてはこの要因は間接的には影響はあろうが，第一義的の主要因とはなりえないであろう．

すると，今回の長期変動の場合の主要因は資源で，その量の反映が漁況にあらわれたものと解される．

資源の長期変動の要因にも自然的要因と人為的要因が考えられるが，今回のブリの場合の如きは後者はほとんど考慮する必要はなかろう．しかしながら，自然的要因のうち何が大きく影響するかの問題については現在のところ明らかでない．

今後この問題について，気象，海象，さらに他の水族などの長期変動と関連して，綜合的に検討し，一つの見解を発表したいと思つている．

終りに臨み，本稿の御校閲を賜つた日本海区水産研究所所長内橋潔，同資源部長加藤源治両氏に厚く御礼を申し上げるとともに，文献について御便宜を賜つた京都府水産試験場桑谷幸正氏に謝意を表わすものである．

Ⅳ．摘　　要

1. 伊根浦のブリ刺網漁業に関する資料並に日本海側の県別のブリ漁獲量統計から伊根浦における冬ブリの長期変動について検討した．
2. 伊根浦においてはブリ刺網の構造，漁場，統数及び漁期は創始以来明治末期まで大きな変化はなかつた．
3. 冬ブリの豊凶の時代区分の概略は次の通りである．

——1625		豊漁
1630——1660		凶漁
1675——1685		豊漁
1690——1765		凶漁
	1715年前後	一時的好漁
	1730年〃	〃　〃
1770——1782		豊漁
1783——1854		凶漁
	1810年前後	一時的好漁
	1830　〃	〃　〃
1855——1920		豊漁
1921——1945		凶漁
1946——		豊漁

4. 伊根浦の冬ブリの漁況に長期変動が認められ，約90年前後の周期性があるかもしれない．なお，その他に10年前後の短期周期もありそうである．
5. 漁況にかかる変動を生ぜしめる主原因は資源量の豊凶にあるものと推定される．

文　　献

1. 羽原又吉 (1954)．日本漁業経済史．上巻．東京，岩波書店
2. 伊東祐方 (1958)．能登西岸定置網の漁況変動についての考察．日水研年報，5.
3. 岩崎英精 (1954)．京都府漁業の歴史．京都．
4. ———— (1955a)．丹後伊根浦漁業史．京都，王文堂．
5. ———— (1955b)．京都府伊根浦の鰤株制の成立過程について．漁業経済研究，4 (2).

6. JAHANSEN A. C. (1926). On the remarkable quantities of haddock in the Belt Sea during the winter of 1925～26 and causes leading to the same. J. du. C. 1 (2).
7. ———— (1927). On the migration of the herring. J. du. C. 2 (1).
8. 木村喜之助 (1949). 現下漁業不振の対策. 水産季刊, 第二輯.
9. 久保伊津男 (1957). 水産資源生物の漁獲高にみられる周期性について. 生物科学, 9 (3).
10. 松下友成 (1953). ブリとその漁業. 漁業科学叢書, 6.
11. 永田俊一 (1957). 能登半島沿岸に来游するクロマグロについて. 定置, 11.
12. PETTERSSON O. (1926). Hydrography, climate and fisheries in the transition area. J. du. C. 1 (4).
13. 佐藤栄・田中江 (1949). 北海道の春鰊資源に就いての考察. 日水誌, 14 (3).
14. UDA M. (1952). On the relation between the variation of the fisheries conditions and the oceanographic conditions in the adjacentwater of Japan. Jour. of Tokyo Fish. Univ. 38 (2).
15. 宇田道隆 (1957). クロマグロの回帰. 定置, 13.
16. ———— (1958). 対馬暖流開発調査報告書. 第1輯.
17. 牛窪其三男編 (1908). 京都府漁業誌, 2.
18. 山口和雄 (1957). 日本漁業史. 東京. 東大出版会.
19. 横田滝雄 (1953). 日向灘豊後水道のイワシ類の研究. 南海水研報, 2.
20. 田名武 (1948). 北海道鰊資源の研究. (第1報) 日水誌, 14 (2).

附　表　伊根浦ブリ網漁獲の豊凶を示す資料

年　号	西　歴	記　事
明応年間	1492～1500	亀島ブリ網発祥 (湾内)
天正〃	1573～1591	平田ブリ網設置 (湾内)
慶長〃	1596～1614	日出ブリ網設置 (湾内) 伊根浦産. 成生産ブリ天下の「札物」として扱わる. 看運上の他「ブリ運上」の責を負わされたのもこの時代か. 富山台網天正・慶長年間に行なわれた. 株制は慶長以前制定？
元和8年前後	1622	田井, 成生ブリ豊漁
寛永18年頃	1641	ブリ内湾不漁のため漁場紛争多し (30年間)
寛文6年	1666	伊根浦3カ村「ブリ運上」1055本と定めらる. 亀島, 平田1000, 日出25, 3カ村百姓数による案分30本. 慶長～寛文時代 (1596～1672) に株制 (124株) 定まるか. これは明治中期まで一定.
〃 7年	1667	伊根ブリの名声を独占するに至つたのはこの年以後.
貞享2年	1685	幕府の田井・長江村ブリ網申請許可方針に対し, 伊根浦反対し, 許可を中止させ, 運上 (1055本) を1300本 (亀島766, 平田467, 日出67本) と定められる. これは明治4年「廃藩置県」まで続く.
元禄3年	1690	漁場紛争の文書に「……近年内海に鰤捕不申候故預申候者共多く……」とあり.
〃 7	1695	田井村ブリ漁獲 115本
〃 8	1696	〃 〃 335本
〃 9	1697	〃 〃 87本
〃 10	1698	〃 〃 203本
〃 14	1702	〃 〃 0本
〃 16	1704	〃 〃 0本
元禄末期	1700頃	「与謝内海の漁業長期不漁と幕府の政治の苛酷…」とあり, 元禄以後若狭湾一帯不漁.
宝永3年	1706	ブリ運上軽減申請文書
〃 7	1710	〃 (2回提出) 宝永年間 (1704～1710) 能登西海村諸魚不漁.

年号	西歴	記事
享保 6 年	1721	ブリ運上軽減申請文書　享保～寛保（1716～1743）全国的に漁業紛争多く，不作続く．
9	1724	〃
12	1772	伊根・溝尻ブリ大漁
13	1728	越中・能登ブリ好漁か
天文 4 年	1739	ブリ運上軽減申請文書
寛保 元 年	1741	〃
延享 3 年	1746	ブリ運上を向う5カ年間半減させる．
宝歴 4 年	1754	不漁のため藩庁へ飯米借入嘆願し米150俵借入．
5	1755	ブリ漁獲 772本（亀島・平田）
6	1756	ブリ漁獲 775本（亀島・平田）
7	1757	ブリ漁獲 216本（亀島・平田）
8	1758	ブリ漁獲 121本（亀島・平田）ブリ運上滞高「4096本」に達し，「被下置候」の処分．
9	1759	ブリ運上「42本」借り受く．ブリ株を手離して本吞百姓に転落するもの続出．宝歴年間（1751～1763）未曾有の不漁．
明和 4 年	1767	ブリ漁獲 133本
6	1769	〃　15,000本大漁
安永 元 年	1772	〃　10,000本 〃
天明 2 年	1782	〃　10,000本 〃
3	1783	飢饉．不漁
6	1786	ブリ漁獲 1,600本
7	1787	ブリ不漁にて嘆願文書
文化 9 年	1812	古来稀のイワシ大漁・干鰯で肥料とす．
10 頃	1813	比較的好漁にて献上ブリ納められる．文化時代（1804～1813）隠岐フリ延縄盛ん．
文政 4 年	1821	ブリ漁獲 917本（3カ村）
天保 7～9年	1836～1838	大飢饉
12～13	1841～1842	ブリ1本も漁獲なし．文政～天保（1818～1844）不作．不漁続きてブリも不漁．天保6年（1835）以降殊に不漁．
安政 2 年	1855	ブリ漁獲7,000本大漁．「宮津事跡記」に「伊根浦に鰤漁稀之夥敷大漁．其外諸魚は殊之外不漁……」その他多少の漁あり．
6	1859	ブリ漁獲14,000本その後大体順調漁 安政年間（1854～1860）長門ブリ延縄隆盛
万延 元 年	1860	ブリ漁獲 3000本
文久 元 年	1861	〃　8000本大漁，富山湾ブリ台網安政3年（1856）～文久元年（1861）大漁
2	1862	ブリ漁獲 10,000本
3	1863	〃　2,000本 不漁
元治 元 年	1864	〃　2,000本 不漁
応応 元 年	1865	〃　1,000本 不漁
2	1866	〃　2,500本
3	1867	〃　15,000本…藩庁えの報告4,400本 口上書「当3カ村鰤漁の儀．往古は内湾重之漁場に御座候処，百四五十年已来，内海之鰤入込不申，凡百年已来は外海而已之漁場に相成……」とあり．
明治 元 年	1868	ブリ漁獲346本（3カ村）マグロ敷網明治初年以後不漁続き．
2	1869	ブリ漁獲　2,500本
3	1870	〃　2,200本
4	1871	〃　10,000本

年　号	西　歴	記　事
5	1872	ブリ漁獲　7,000本
11	1878	〃　10,000本．明治10年頃南薩ブリ飼付漁業開始．
12	1879	〃　5,000本
13	1880	〃　10,000本
14	1881	〃　12,000本
15	1882	〃　3,000本
16	1883	〃　3,000本以下
23	1890	〃　14,000本
24	1891	〃　20,000本「富山湾台網…鱗接櫛比す…」台網隆盛．この期以後衰退をみせる．
25	1892	〃　4,000本，麻苧製日高式大敷発明．
26～28	1893～1395	ブリ不漁
29	1896	ブリ漁獲 12,200本，イワシも大漁
33～35	1900～1902	3カ年平均漁獲 10,000本（23,870〆，1尾2〆として換算）田井村ブリ刺網盛んに使用せられたるは明治32～33年頃
38	1905	伊根，日高式大敷網1カ統設置 漁獲高（大敷網）11,6千円（ブリ以外を含む）1ケ統
明治 39 年	1906	53,6　（ブリ 91,844本）　2ケ統平均
41	1907	24,3　田井，成生大敷網設置，成生ブリ網中止，富山大敷網出現，藁台網急減
42	1908	35,3
43	1909	43,5　日高氏ブリ大謀網考案
44	1910	30,0
45	1911	22,1　能登台網減少し，大正初年までに姿を消す
大正 2 年	1913	伊根浦ブリ刺網中止，成生大敷網不漁
3	1914	田井，上野式網を設置するものあり．
4	1915	ブリ漁獲量（大敷網）22,200本　3ケ統平均
5	1916	29,400本
7	1918	26,100本
8	1919	23,300本
9	1920	19,000本
10	1921	5,000本　不漁
11	1922	6,000本　不漁
12	1923	5,300本　不漁
13	1924	3,400本　不漁
14	1925	3,100本　不漁
15	1926	2,300本　不漁
昭和 2 年	1927	13,600本
3	1928	1,400本　不漁
4	1929	600本　不漁
5	1930	900本　不漁
6	1931	500本　不漁
17	1942	京都定置網数十年みざる大漁

「丹後伊根浦漁業史」「京都府漁業の歴史」
「京都府漁業誌」　「日本漁業経済史」
「日本漁業史」による．